

## 例会記録

## 日本医史学会 11 月例会

令和4年11月26日(土)  
オンライン開催

- 「光後玉江の処刑録—近代初期の在村女性医師の診療記録を読み解く—」  
木下 浩(長島愛生園歴史館学芸員/  
岡山大学医学部客員研究員)
- 「歴史的観点から理解する医学用語語源」  
杉田克生(千葉市療育センターセンター長/  
千葉大学子どものこころの発達教育  
研究センター 特任教授)

日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・  
日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学  
会 合同 12 月例会

令和4年12月17日(土)  
オンライン開催

進行：佐々木典康(日本獣医史学会)

- 「中世日本にみる歯科医療事情」  
日本歯科医史学会：西巻明彦
- 「博多人形師と解剖学—博多人形師と九州帝国  
大学医科大学解剖学教室 櫻井恒次郎教授“美術  
解剖学”—」  
日本看護歴史学会：丸山マサ美
- 「研究教育の「場」をめぐる～『洋学史研究事  
典』編集補遺」 洋学史学会：海原 亮

- 「1889～91年“旧ロシアかぜ”は“コロナウイ  
ルス”によるものだったか?—インフルエン  
ザウイルス循環からの考察—」

日本医史学会：逢見憲一

- 「生薬ハンゲの修治に関する薬史的的研究」

日本薬史学会：牧野利明

- 「日本獣医史学会の歴史」

日本獣医史学会：小佐々学

## 日本医史学会 1 月例会

令和5年1月28日(土)  
オンライン開催

日本医史学会編『医学史事典』刊行記念1月例会  
挨拶 小曾戸洋(『医学史事典』副編集長)

第Ⅰ部 世界の医学(1)：古代から近世まで

矢口直英(『医学史事典』第Ⅰ部 執筆者代表)

第Ⅱ部 世界の医学(2)：近現代

山内一信(『医学史事典』第Ⅱ部 執筆者代表)

第Ⅲ部 日本の医学(1)：古代から近世まで

真柳 誠・青木歳幸(『医学史事典』第Ⅲ部 執  
筆者代表)

第Ⅳ部 日本の医学(2)：近現代

渡部幹夫(『医学史事典』第Ⅳ部 執筆者代表)

第Ⅴ部 社会の中の医学

永島 剛(『医学史事典』第Ⅴ部 執筆者代表)

総括 坂井建雄(『医学史事典』編集長)

## 例会抄録

## 西郷隆盛と上野戦争における戦傷兵横浜輸送の算段

岩下 哲典

2019年末、群馬県高崎市の名雲書店から

『NEWS BOARD』139号が送られてきた。六六～

六三、二〇六～二〇七頁に「西郷隆盛書簡」とあり、まずもって、その価格（約五百万円）に驚いた。そして、日付の「慶応四年五月十四日」にも驚愕した。西郷が、上野彰義隊と戦う前日である。宛先は「肝付兼両、小松帯刀の実兄と解説にある。山岡鉄舟が彰義隊を説得したことも書かれており、目配りがきいている。かつ『西郷隆盛全集』に未収録の史料であるとも記されている。

がぜん中身が気になった。高橋泥舟史料研究会のメンバー（イアン・アーシー、毛塚万里、服部英昭各氏）と読んでみた。その結果の積文（古文書の文字を現代文に置き換えた文章）は以下の通りである。ほほ、完璧に近いものだ。

（書簡本文）

明曉、上野屯集之彰  
義隊討伐可被為在模様  
ニ而出軍之賦、御座候間、人  
足雇入等之義ハ何となく入  
用丈ケ手当相成候様御計  
可被下候、成丈外夫減少之  
方可宜、自然慥成者御調可  
被下候、いま御達不相成候間  
其含を以、宜様御頼申上候、以上  
五月十四日  
追而、手負人数廻船之義ハ  
如何之都合ニ而御座候哉、相分  
次第、為御知可被下候

（包紙上書き）

肝付郷左衛門様 西郷吉之助  
要伺

内容は、次のようになる。

明るる早朝、上野に集まった彰義隊を大総督宮が「討伐」される模様で「出軍之賦」、すなわち開戦のための軍勢の割り当てがありました。それなので、「人足雇入等」のことは「何となく」必要なだけ取り計らっていただきたい。なるだけ「外夫」（おそらく譜代ではなく新規雇い入れ

の陣夫のこと）は減らすようにするのがよろしいかと思う。おのず身元が確かなるものをあらかじめお調べいただきたい。未だお会いすることが出来ないで、その含みでもって、よいようにお願いしたい。

明日の戦争に備え、彰義隊側に悟られないように陣夫（武器弾薬・食料などを運送する人夫）を動員すること、機密保持のため、新規の人足は雇わず古参の人夫で、身元が確かな者を雇い入れることを指示している。その含みでお願いしたいとあって、西郷が情報漏えいにも配慮した様子うかがえる。会えないとあるので、戦争に備え、各方面に同様の手紙を書いて多忙を極めている様子うかがえる。手紙の相手は、家老クラスの薩摩隊の隊長肝付ということになる。

追って書きには、「手負人数廻船」、すなわち、戦争による負傷者を横浜軍陣病院に運ぶための「廻船」、つまり病院船は、どうなっているか、判明次第、お知らせいただきたいとある。激戦になることを見越して、横浜の外科専門病院に戦争負傷者の搬送手配を依頼しているのである。実に用意周到である。

ここには、残存旧幕府軍を上野戦争で一気に勝利するために、兵士の士気にかかわるロジスティックス（兵站）に関して、十分に配慮する西郷の繊細な性格がよくあらわれている。上野戦争が翌一五日の一日で、新政府軍の圧倒的勝利で、かたが付いたのは、激戦が予想された正面黒門に西郷率いる薩摩軍が殺到したこと、本郷台からアームストロング砲が撃ち込まれたことが、あげられる。しかしながら、その背景として、薩摩部隊の士気が高かったのは、西郷がロジスティックスに気を配り、十分な武器弾薬と病院船の手配をしていたからである。それが機密理に行われていたことをも本書簡は物語っている。

あわせて、西郷が薩摩の兵士たちに圧倒的に人気があった背景には、「西郷先生は、傷ついた仲間を決して見捨てない」という西郷への個人的安心感・敬愛があったことを指摘しうる。それは、大きな軍功がなくても戊辰戦争後の恩賞において西

郷の金額が最も高かった理由であろう。それは、私学校、西南戦争まで持ち越され、また、大津事件直前の西郷生存および帰国言説にまで、否、現代の「西郷どん」人気まで行きつくかもしれない。

歴史的に実に貴重な史料であるといえよう。金額が高いか、低いかは問題ではないのかもしれない。

## 参考文献

藤村泰夫監修『神奈川から考える世界史』えにし書房、2021年  
 岩下哲典「徳川政権、文と武の相克—ペリー来航から明治維新への道—」同編『「文明開化」と江戸の残像』ミネルヴァ書房、2022年

(令和4年9月例会)

## 緒方家と森鷗外

石井 元章

文京区向丘の高林寺にある緒方洪庵の追頌碑文を明治45年に森林太郎(鷗外)が撰じたことはよく知られている。しかし、緒方家と鷗外の関係はそれだけに止まらず、当時のイタリア王国ヴェネツィア市に斃れた、洪庵の五男惟直が遺した娘、エウジェニア=ジョコンダ=豊が森を介して来日することになる。本発表ではその経緯を紹介する。

惟直は1876年11月から1878年3月までヴェネツィア商業高等学校領事科で学ぶとともに、日本語を教えた。その間ヴェネツィア生まれのマリア=ジョヴァンナ・セロッチェと恋に落ち、1877年9月10日に娘のエウジェニア=ジョコンダ=豊を授かる。壊血病に冒された惟直は1878年4月4日に妻の家で息を引き取るが、命の危険を察知した惟直はその4日前に受洗し、カトリック教徒としてマリア=ジョヴァンナと正式に結婚していた。4月6日に日本人として唯一サン・ミケーレ島記念墓地に埋葬された惟直の墓は、この時点では共同溝であった。

一方、商業高等学校第4代日本語教授は岩手県一関田村藩出身の長沼守敬で、彼は1881年から1887年までヴェネツィア王立美術学院で彫刻を学び、帰国後に東京美術学校に奉職する。長沼は1884年の終業式において賞賛を受け、その技倆を見込んだ日本名誉領事グリエルモ・ベルシェが、惟直の墓の制作を長沼に依頼する。惟直の遺体は1884年12月22日に共同溝から掘り起こされ、完成した大理石墓に移された。

長沼は、帰国前に日本人の知己を頼って1886年にヨーロッパを周る。最初の訪問地ミュンヘンで7月15日に同市留学中の森鷗外と会った時に、洪庵の六男収次郎の同級生森は長沼に惟直のことを尋ね、長沼はその娘についても告げる。森は驚き、その情報を早速大阪の収次郎に伝える。1889年からドイツに留学した収次郎は、名誉領事ベルシェを介してやっと姪の消息を掴み、マルセイユに來させたらうえ、日本へと連れ帰る。

(令和4年9月例会)

## 緒方家に迎えられた エウジェニア=ジョコンダ=豊の生涯

緒方 洪貴

エウジェニア=ジョコンダ=豊は緒方洪庵の第

10子である惟直(十郎)とイタリア人のマリアの